

大宮庫吉

立派な人というものは、その人の行蔵の中に、おのずからにして、犯し難い威厳と気高い品位というものがよみとれるものである。威厳というものは、いわばその人のもつ天地を貫く正義の確信から生まれるものである。品位というものは、おそらくは、その人の自分に求めるところのない淡々たる清潔さから出てくるものであるにちがいない。

私は大宮翁について必ずしも多くを知らないが、偶々恵まれた翁との出会いを通して、私にとっては大宮翁が稀に見る秀れた人であることを知り、翁は私にとり、かねてから敬仰的でもあった。私は、翁の知遇を得たことをありがたい俸せと思ひ、誇りとも感じてきたのである。

翁は、四国の南予に生まれ、若くして、酒造業界に身を投ぜられた。門閥や学歴をとりでしない文字どおりの自立自成の人であった。自らの人格と才幹を自力で開発錬磨された人であった。しかもその生涯を唯一つの業界に打ち込まれ、稀有の成功を収められた人であった。

資本主義の倫理は本来、利潤追求の成否に求めるべきではなく、事業自体の生々たる発展と、

それを貫く没我的な精神の過程そのものの中にあるといわれている。換言すれば、「仕事三昧」に生きる充実した実践の過程にこそ、資本主義の真髓がよみとれるものであるということであるう。

翁はそういう意味で、自らの仕事の中に三昧の境地を生き抜かれた人であられたと思う。しかも翁の生活は、張りつめた弓弦のように、瞬時もたるむことがなかったようだ。

また翁の容姿は端正であり、そのたたずまいは高雅でさえあった。切り捨てるべきぜい肉もなければ、寸分の心のたるみもないように見えた。その中には、犯し難い威厳とすがすがしい気品があった。しかも翁のマナーは謙遜で、驕慢さはかけらも見られなかった。

そして、それらの徳目がすばらしいバランスを保っているようだった。私は、翁の如き人は、神の造りたもうた傑作であるように思われてならない。

翁逝いて、天地にはまた春が巡ってきた。その春が過ぎたと思うと、いつの間にか野山は新緑で装いを新たにしていた。凡てが生命力に溢れて美しい。しかし翁のような秀れた人の生涯は、それ以上に美しいものであったと思う。私は翁の多彩なご生涯の中から、多くの美しい宝を探り出すことができるように思う。生理的生命は有限であっても、人格の光は、翁が日毎仰ぎ見られた観山の嶺とともに永遠であるからである。